

等を亡ぼさうではないか」といふ事を相談しました、そして、愈々其計画を實行するといふ事に決めて、各自二つの角をとぎすまして居ますと、其中で、一番年とつた牡牛が、皆に申しますには、「なる程、屠牛人が吾等を殺すには違ないが、然し夫にしても中々上手にやつてくれて、決して無駄な苦を吾等にかけないと思ふ、今若し吾々が、彼等を亡ぼして仕舞ふといふと、彼等から殺されることは免れるにしても、其代り今度吾々は、下手な人の手にかゝつて死なねばなるまい、何故かといふに、縦令、國中の屠牛者を残らず亡ぼして仕舞つた所が、人間といふ者は、其爲に牛肉を食べることを已めないからなり、一害を以て他の害に代ふるは愚なり」

其四十八

鹽商人と驢馬

鹽商人がある時、驢馬をつれて海濱に鹽を買ひに行きました。所が、其歸り道に谷川があります。其谷川を渡る時に、此の驢馬は、態と足を履み滑らせて忽ち、河の真中でひつくり返りました。そして起き上つて來た時には、鹽は大方水で溶けて仕舞つて、其爲に大に荷が軽くなりました、商人は、仕方なしに 元の所に引つ返して、も一度鹽を積み直して、さて其谷川の處に來ますと驢馬め、前と全じ目的で以て、又ひつくり返つて起き上る時に、荷物重さを半分にして仕舞つてそして、丁度目的を遂げた様な風に、勇ましく、嘶いて居ます、そこで商人は、とうとう其惡戯を考へついて、三度目に、全じ場所へ取つて返して、今度は、鹽の代はりに、海綿を一杯、驢馬の脊中に積み込んで戻りかけました。さて、谷川まで

來ますと、例の通り驢馬の奴さん、又ひよいと水の中にひつくり返りました、所が、今度は鹽と違つて海綿と來たから堪らない、だん／＼水が浸み込んで重くなる許り、起き上つて見て、さすがの驢馬も、之には弱り入つて、閉口しましたとさ、

其四十九 病氣の鹿

一匹の鹿が病氣で、森の隅の靜な所に寝て居ますと、大勢仲間の鹿が見舞に來ました、しかし見舞に來たはよいが、病氣の鹿が、食べる爲めに取つて置いた食べ物を、皆で分けて食べて仕舞いました、それがために、此鹿はとう／＼死んで仕舞つた、病氣の故ではない、食物がなくなつて、悪友は利益よりも寧ろ害惡を持ち來ること多い

狐と鳥

いつも／＼盜賊猫がやつて來ては、自家の鶏を捕つて行つて仕様がなから、よし／＼今に殺してやらうと思つて、牛肉の中に毒を入れて、庭に投げて置きました所が、鳥めが、屋根の上から、これは甘いものを見つけたと、喜んでくはへて木の上へ飛び上りました、すると、狐か其處へやつて來て、鳥め、甘い物を持つて居る、一番だまかして取つてやらうと思つて、極めて丁寧な調子で

狐「これは、神様の御使鳥さん、其後はまことにしばらく

鳥「あなたは、私を誰だと思ひですか

狐「左様、あなたはあの鷲さんでせう、いつも神様の所から、お使に來て、私の所へ甘いものを持つて來て下さる………」

これを聞いて、鳥は、さては狐は己を鷲と間違つ